

私のケガや病気との付き合い

2023年5月24日

太田隆次

最初のケガは5歳の時のおでこ

満州の奉天の満州鉄道の社宅の玄関の階段で転げ落ち、おでこに大けがをしました。

幸い、髪はこの年でも幸いまだ多い方なので触らないと人目には分かりません。

洗髪するたびに「わが満州時代の名残り」と思うことにしております。

次のケガは戦時中に駆り出された勤労奉仕で深切りした左の人差し指です。

国民学校4年の時、山深い生駒山麓に住んでいましたが、山道の雑草刈りをするこ
なり、「スピードがとろい」と叱り飛ばされ、思わず左指を深く切ってしまいました。年長
の誰かが飛んできて、煙管用のたばこの葉を厚く巻いてくれたのが効いたのか治りましたが、
今でも傷跡が戦時中の記憶を物語るかのように残っています。

次のケガは野球による名誉の負傷です

国民学校時代と中学時代、たまたま家に古いキャッチャーミットがあったので否応なしに
キャッチャーをさせられました。マスクはまだない時代で 枚岡第六国民学校との遠征対抗
試合で 6対4で負けましたが（額田さん見ていたかな）ファウルチップを右目にくらい、
それ以来、右目の視力は左目よりマイナス0.2のガチャメです。外見上、人様には分から

ず、運転免許の視力検査で、83才で返上するまで「注意なし」で 勿論、生涯無事故無違反でした。

尚、「ボールがダブッて見えにくくなりました」と、この試合で監督の先生に泣き言を言ったら、「ボールを見て打とうと思うな、当てればいい」と言われました。そうしたらいつも貧打の私が何と連続、センター前ヒットで我ながら信じられませんでした。

「我こそはと大振り」の打撃で不振に喘いでいる現在の巨人軍も参考になるのでは？

次は「失明！」と観念した瞬間です

55歳の冬、車を洗っていたら左胸が急に痛くなり、風船を冠状動脈に太ももから送って患部を6気圧ぐらいで押さえつけるアメリカ生まれの手術を某大学病院で受けました。10日ぐらいの入院でしたが、おかげ様で現在まで異常はありません。

手術に先だって、麻酔をかけるのですが、麻酔が切れているのに視力が戻らず、このままでは失明の人生を送ることになると「まだ見えません！」大声で叫びました。麻酔の新米？医師が飛んできて処置して目が見えるようになりました。